



泰山登頂紀
(その1)

いなふくクリニック
稲福 薫

クリニックを開設するにあたり多くの方からさまざまな援助をいただいた。そのなかでも不思議の一つが泰山登山である。開設の半年ほど前で準備に心を煩わせていた時期であった。長いこと音信不通になっていたある女性から仕事中に突然電話がかかってきた。きっかけは十数年も前の話にさかのぼる。彼女には色々なものを見る能力があるようで、何かの話からか前生話題になり、彼女が言うには、私（筆者）の前生は中国の人であるという。こんな姿で崖の上から世界を見渡している、とメモ用紙にさっと簡単な絵を描いて渡してくれた。古代中国風の着物を着て岩山の崖の上から下界を眺めている姿である。その絵をもらってアルバムにしまったまま、「そんなこともあるか」という程度でさして気にも留めず、いつのまにか記憶からも消えて十数年も経ったある日のこと思いがけず電話がかかってきたのである。彼女の話では白い髭のおじさんがこのところ毎晩夢に出てきては早く連絡をしろ、と持っている杖でついてせかすものだからしかたなく電話をしているのだという。話によると、わたしの前生は冉求（ゼンキュウ）という孔子の弟子の一人で、絵の場所は山東省の泰山の近くにある方山だという。

突然舞い込んだ不思議な話にすぐに飛びついた。別に真に受けたわけでもないが、彼女の正直さはよく知っており、また損得関係があるわけでもない私にわざわざ電話をかけてよこす彼女の話が自然に聞こえた。それに、せちがらい話ばかりのこの御時世でクリニック開設という現実問題ばかり追い掛け回している毎日である。こんな面白い話に飛びつかない手はない。

さっそく、孔子関係の本で冉求という人の経歴を調べてみた。歴史上の重要人物ではなさそうで、本にも数行程度しか登場しない。孔子が一度は失職した魯の国に戻るのに功績があったそうであるが、重税を取り立てる役人だったために孔子の怒りを買って、絶縁されたという。期待していたような聖人君子でもなさそうだ。

山東省、泰山、方山、についても何にも知らない。インターネットで調べてみた。泰山は日本でいうと富士山のようなもので、中国大陸を龍になぞらえると頭に相当する髓一の山だそうだ。高さは1,540mとそんなに高くはないが、秦の始皇帝から周恩来に至るまで時の権力者が詣でて神様から権力のお墨つきをもらった山だそうだ。そんな天下一の山だから中国人ならだれでも生涯に一度は登りたがるという。その証拠に、帰ってきて中国人に泰山登山の話をするに急に目を輝かせてうらやましそうにする。なにしろこの世の中心地を意味する中華のそのまた中心が泰山なのである。

山東省についても調べた。中国のほぼ真中にあり、黄河が流れ、省都は済南市である。孔子ゆかりの地でもある。職場の同僚たちに問題を出してみた。山東省って人口はどれくらい？と聞くと、「五万人くらい？」「いや五十万人はいるだろう」という。実際は日本の人口とほぼ同じ、約一億人である。中国人に会って情報を得ることにした。沖縄在住20年という上海出身の人だった。すると、「あそこは田舎だから山賊が徘徊している。一人で行くと身ぐるみ剥がれてしまうよ」などと脅された。こりゃー、やばい、と一瞬たじろいだが、それでも行くしかない！？と、現地の旅行会社に案内人を手配してもらった。あとで知った話だが山東省は山賊の出身地として有名ならしい。方山というのも霊岩寺という古いお寺の後ろにひかえる岩山の名前でごく狭い地域の人しか知らず、地図にも載ってないらしい。現地の旅行社でも色々調べてやっと場所がわかったという。そんなわけで旅行社のほうはこんな変なところに行きたがる人間はたぶん学者か何かで研究目的なのだろうと



霊岩寺の山門（後ろの岩山が方山；左上のほうに東屋がある）

うわさしていたという。一人で行くつもりでいたが、妻は旅が旅だけに一人でやると帰らぬ身になってしまうかもしれないと案じてついてきた。かくして泰山参詣の旅が始まった。

那覇空港から福岡空港を經由して山東省の青島（チンタオ）に降り立った。青島は九州の海向かいで中国大陸から日本や朝鮮半島に向かって突き出した山東半島の付け根にある。そこから内陸に向かう。不安げに待っていると華奢でかわいらしい20台の独身女性が「ようこそ、山東省へ」と笑顔で迎えてくれた。お願いしていた案内人の劉さんである。彼女の笑顔で山賊の心配が一気に晴れた。空港から車に乗り、高速道路を一路西に初日の宿泊地である済南市へと向かった。道の両側は黄河の流域に開けた世界的な穀倉地帯で、行けども行けども見渡す限りの畑である。やがて、霞のかかった地平線に黄色い夕日が沈み、とっぷりと日が暮れたところに済南市に着いた。済南市はあの物議をかもしたアジアサッカーの準決勝戦が行われた市であり、過去の日中戦争では戦場になったいわくつきの場所である。その百キロ先に方山がある。ホテルに着くなりさっそく市内を妻と二人で散策した。山賊どころか済南市はすさまじく発展し続

ける近代的な500万都市である。ホテルのすぐそばに大きなデパートがあり、沖縄のより何倍も大きい。日本と同じような品物が並べられ、値段も大して変わらない。中国の平均賃金であるものが買えるのかと余計な心配をした。

次の朝は早起きをしてホテルの近くを散歩した。旅先での楽しみの一つがこれである。朝市を見て回る。人々が思い思いの朝を過ごしている公園の周りに屋台が軒をならべ、豆乳やら、饅頭やらのおいしそうな香りと湯気が立ち上って興味がつきない。そのうち、のどがいがらっぽくなってエヘンエヘン、ペッと痰をはきたくなった。まわりの人たちもカーッ、ペッ、と痰をはいている。ここは大陸性気候なので空気が乾燥しているのである。聞くと肺の疾患が多いのだそうだ。

朝食をとってさっそく方山へ向かう。泰山の登山口の町である泰安市とここ済南市との中間にあるという。中央街道を南にひた走る。道の両側には一面の緑の平野の中からごつごつした岩山があちこちにそびえ立っている。方山もそんな景色の一つなのだろう。トラックが頻繁に行き交う道のところどころに簡易宿泊施設のようなものがあり、その前で若い女性たちがあら

れもない姿で肌を露出させている。鼻の下が伸びそうになるのをがまんして劉さんにあれは何かと聞くと、トラック運転手の常宿で夜の相手をする女性の客引きだという。そのうち、車は横道に入り、山の方に向かった。ゆるい坂道をのぼっていく。周りは牛だの馬だの畑だのと中国の山村の風景が広がっている。1時間ほどして行き着いた先に古寺があった。霊岩寺である。中国の四大古寺の一つで国宝級だという。観光客は多いが日本人はみあたらない。大きな寺で境内の広さは日本の東大寺ほどはあるだろう。千年は経っているという柏の木がごろごろしている。かたわらには、鎌倉時代に訪れたという日本からの修行僧の墓があった。墓は立派な佇まいで、掃き清められている。あの頃にはここに来るのさえ命がけだったのだろう。そして修行半ばにして命を落とし異国の地に葬られている。それに比べてひよいひよいと来てこの地に立っているわが身を振り返って複雑な思いにかられた。

寺の背後から覆い被さるようにして巨大で切り立った岩山が聳えている。これが方山である。堂々とした姿に圧倒される。方とは長方形の意味で、字のごとく箱のような岩山で、まるでとてつもなく大きな物を入れているようだ。数百段の階段が岩山にへばりついて崖の上まで続いている。目を凝らして見るとはるか上に点のように東屋が見える。あそこまで登るのかと思うと意気消沈しそうになるが、明日の泰山

では7,000段を登らなければいけない。これくらいでおじけついている場合ではないと気を取り直して登り始めた。すると中年女性がミネラルウォーターを手提げ袋いっぱい背負って後ろからついてきた。こんなに重いものを持って大変だと同情していたら押し売りだった。いらぬというのに後をしつこくついてくる。手ぶらな身でもきついのご苦労なことだ。無視して登っていたがあまりのしつこさに根負けして一つ買うことにした。お金を受け取ると女性はきびすを返すように階段を下りていった。彼女らは、客がふもとではいらぬと言っているがそのうちゼーゼー、ハーハーして水を欲しがるとふんでいるのだろう。そのようにして日に幾度となく客について山を上り下りしているのである。たくましい。

一時間ほどで頂上に立った。眼下に霊岩寺の全貌とその地方がパノラマのように眺められる。はるか先には泰山の山並みが霞んで見える。崖の洞窟には数mほどの磨崖仏があり、端っこには東屋が建っている。その上に立った。足元は目もくらむような崖で、足がすくむ。メモ用紙の景色とよく似ている。でも、何も起こらない。何も聞こえない。しばらくはボーと空を眺めていた。自分の前世という人はここで何を思ったのだろう。空の広さがやけに目に染みつく。

(会報7月号へつづく)

原稿募集!

随筆のコーナー (2,500字以内)

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。